公同礼拝

２０２４年7月２８日(日) 午前１０時３０分
午後４時
司式　牧師 姜 徑米
奏楽　大澤葉子

前　　奏
招　　詞　詩　編　２９編１ｂ～２節
讃　　詠　　５４６
主の祈り
聖　　書
イザヤ書　２６章７～１１節　　(旧 1099)
マタイによる福音書２３章１～１２節
(新 45)
祈　　祷
使徒信条
讃 美 歌　　６７
説　　教 「信仰者の立ち位置」牧師 高橋和人
祈　　祷
讃 美 歌　　３９１
献　　金
頌　　栄　　５４０
祝　　祷
後　　奏

起立が困難な時は着席のまま礼拝します。
礼拝は前の方から静かに着席しましょう。

７月の祈り

聖霊の導きを受けて、上にあるものを求め、希望に生きることのできるように。

混迷の時代にあって、御言葉を灯として、信仰の歩みを積み重ねることができるように。

礼拝、祈祷会、教会学校が力づけられるように。

震災の地の教会と人々を覚えて。戦争と紛争の地に平和がもたらされるように。

今日の祈り

日々の信仰生活が御言葉の導きを受け、力づけられるように。

愛する者を主の御許に委ねた家族に主が寄り添い慰めを与えられるように。

教会学校の一人ひとりが主の恵みを受け、信仰への歩みが支えられるように。

暑さと感染症の脅威から守られるように。

「信仰者の立ち位置」　高橋和人
マタイによる福音書２３章１～１２節

24 から 25 章は主イエスのまとまった説教になっている。主イエスの説教は「山上の説教」(5-7)「十二弟子への説教」(10)「天の国の 7 つのたとえ」(13)「天の国の民」(18-20)「オリーブ山の説教」(24-25) と五つにまとめられている。23 章は最後の説教の導入にあたる。主イエスは十字架の死の前に弟子たちに伝えることがあった。新たな生き方である。それを当時の指導者たちと比較された。

ファリサイ派は主イエスの論的であった。主イエスはその硬直した聖書理解に反対してきた。それは厳密だが、自分たちに合わせたものとなり、人々を遠ざけるものとなった。律法は神を神とし、人を人とするものだ。神を見上げさせるためのものだ。

主イエスは律法学者とファリサイ派の言うことを守るように言われる。律法を重んじることは正しい。御心がそこに表されているからだ。

しかし、彼らの行いは見習うなといわれる。神に向けるべき目を人に向けるためだ。律法を字句のように守れないものを下に見、助けることをしない。

そして自分は人に見せようとする。聖句の入った小箱（申 6:8)、衣服の房(民 15:38)を強調する。主イエスはむしろ見えないところでの祈りを教えられた(6:6)。

そして、人は人にほめられることを喜ぶ。「先生」「父」「教師」と呼ばれることを好む。これらは当時の律法の指導者への敬称。人は敬称に弱い。上席を好むのも同じだ。

どのように人を見、どのように人から見られるかに捕らえられれば、人は見た目に生きるようになる。そして人の目を恐れおびえさせる。それは神と共に生きることを失わせる。それだけでなく、自分も人と比べて生きるようになる。認められず、評価されなければみじめに見える。

しかし、見上げることをすれば、そこに主のまなざしがあることを知るようになる。師は一人だけ、父は天の父、教師はキリスト。

このまなざしは、姿勢を低くしてこそ見ることのできるものだ。なぜなら、愛されることに信頼していなければならないからだ。主は仕える者となれと言われる。なぜなら、そこで見えるのは、十字架の主イエスのお姿だからだ。